

## 吉田祐起先生が国際賞を受賞

4月3日～6日にラスベガスで開催されたSAM国際大会において、広島支部会員で株式会社ロジタント代表取締役の吉田祐起先生が本年度のThe Material Handling Awardを受賞されました。この賞はマテリアルハンドリング（運搬・物流管理）の分野で顕著な貢献をした者に与えられるもので、本賞は日本人としては初めての受賞となりました。受賞式での吉田祐起先生の英語のスピーチは9分間に及び、スタンディング・オベーションという形で会場から大きな賞賛を頂いたそうです。

以下は同氏の大会出席報告です。

## 2005 SAM International Business Conferenceに出席して

SAM広島支部長

(株)ロジタント代表取締役

吉田 祐 起

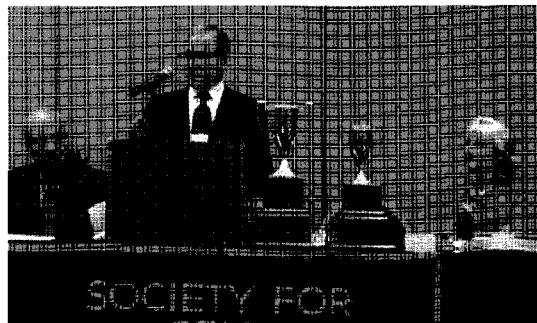
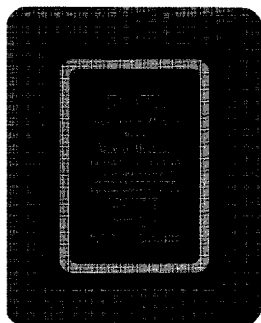
「2005 SAM Material Handling Award」の受賞候補に選ばれた私は、得がたい光栄と受けとめてラスヴェガスで開催された標記の大会に出席しました。20年ぶりの同市入りで、当時は砂漠の中に忽然と出現した空港に着陸した感じがしたものでした。様変わり都市発展の姿が印象的でした。

4月3日から6日までの4日間期間中は可能な限りに多くの分科会に出席して本場英語の勉強も兼ねようという意気込みで行きました。小林会長さんから「前夜祭にも出席したら参考になりますよ」というご示唆を得ていたこともあって2日に現地入りして前夜祭に備えました。順を追って体験報告をさせていただきます。

前夜祭に出て良かった！というのが率直な感想でした。かねてよりSAM米国本部は大学教授や学生の会員が多いということを知らされていたのですが、正味1時間の前夜祭で若い学生さんたちの熱気を体感しました。後述しますが、受賞の後に予定している私の英語のスピーチがあるのですが、若い学生さんたちを目の辺りにみて、これなら思い切りスピーチが出来るぞ！と、密かに思いました。

前夜祭の翌日は午前8時から始まり、全期間を通じて行われたのが87のconcurrent session、204件のほるテーマのプレゼンテーションが大学教授や大学院生（いずれもSAM会員）諸氏によって熱心に展開されました。

Chair（議長）による司会で発表者が20分間の研究発表を行います。その後で、Discussant（討論者）が発表内容に対する講評を行います。その後に聴講者からの質問や意見が誘発される仕組みです。Sessionのテーマを選んで、期間中はフル出席した私でしたが、5、6回のセッションで勇気を出してコメント発言をしました。特に「リーダーシップのあり方」をテーマにしたものでは、私自身が「21世紀型リーダーの3条件～洞察・説明責任・



動機づけ～」という得意の講演ジャンルを持っているだけに、研究発表者の語る内容にエールを贈る心でコメントを述べました。閉会後に発表者はもとより、受講者が共感を得たように名刺を差し出して握手を求めてくださいました。

ケインズの言葉「It is much important how to be rather than how to do.」（如何に成すかということより、如何にあるべきかということのほうがずっと大事だ）を引用して教育のあり方に言及しました。ドライバー教育に置き換えれば、「上手な運転の仕方教育」でなく、「良き運転者としての人間教育」が大事だといった私の発言にはことのほか共感を得ました。

さて、晩餐会&表彰式の模様をお伝えします。4百人近い参加者の会場で、ひな壇席の10数人に交じってのことです。もう1人の受賞者は「SAM Management Excellence Award」のDr. Sandra Strecher Harper女史です。学者としてのキャリアは実に多彩な方です。SAM米国本部のPresident & CEO（会長兼最高責任者）であるDr. Moustafa H. Abdlesamadが「Texas A&M University-Corpus Christi」のCollege of Business学部長を務めておられるのですが、同女史はその同じ大学でアカデミック業務の教務事務官兼副会長やコミュニケーション教授等々の要職にある人物です。

同女史が受賞に先立って基調講演（コミュニケーションのあり方）をされました。周到に準備をされたテキストをもとに、ダイナミックでほれほれするような鮮やかなプレゼンテーションをされました。実は、その直前まで私が気にしていたことがあるのです。許された私のスピーチ時間は8分間でしたが、内容を吟味する度に欲張って加筆したために、1分間の時間超過になることを気にしていたのです。雰囲気を見て、その場で一部をカットすることも止むなしと考えていたのです。

ところが、若い学生さんたちの熱気や、くだんのDr. Harperの劇的なプレゼンを目の当たりにした私は、この雰囲気なら少々時間オーバーでも構わないな、と感じたのです。思い切ってテキストを一言一句洩らさず、かつ、冒頭のアドリブも加えて思いっきり大きな声でスピーチをしました。と、どうでしょう！スピーチを終えるや否や、一斉にstanding ovationが、それも口笛ピーピーを伴って起き上がりました。先の基調講演をされたHarper女史の素晴らしい講演に対しては無かったのにと、複雑な心境でした。閉会後に多くの方々から私に賞賛の言葉を頂戴したのですが、人生体験の一端が共感と呼んだのかなと感じました。スピーチの末尾に引用した英書の一節「Try to study as if you were to live forever, and live as if you were to die tomorrow.」（永遠に生きるとして学び、明日死ぬると思つて生きよ）があるのですが、ひな壇で隣り合わせた役員婦人から「イイ言葉ですね。メモしましたわよ」と共感していただきました。

大会期間中は忠実に最後のさいごまで出席した私でしたが、最終行事のConference Critique（会議反省会）では、さすがに長丁場の日程であったためか、会場は空っぽでした。Dr. & Mrs. Abdlesamadとフランスからの参加者と女性大学教授と私の5人でした。大会運営では副会長でもある奥さんのMervatさんや、お二人の息子さんたち家族挙げての貢献が顕著でした。「来年度の開催地であるOrlando, Floridaでは、ミスター・ヨシダはゲストで来てください。参加会費（3百ドル余）は要りませんよ」と言ってくださいました。来年のフロリダ行きを真剣に考えるようになりました。今回はsessionで研究発表に応募してみるか、とすら欲張った想いを抱いています。

SAM米国本部では大学教授や大学生（特別年会費50ドル）が極めて大勢で、年次大会形式による学生会員の研究発表コンペティションは21年目だそうです。学生たちもボードメンバーになって会の運営に尽力しています。多くの賞も与えられています。社会に巣立つ若者たちを経営者団体であるSAMがこのような形でその場所を提供したり、トップマネジメントの方々との接点を実現していることは、さすが90年の歴史を誇るSAMだと感服します。

末尾に生臭い話題を述べます。12年ぶり、3回目の渡米でしたが、滞在中や往復機内での体験を通して幾つかの情報収集ができました。その一つは、10数回利用したタクシードライバーさんから得た情報です。何と、ラスヴェガスでは「個人タクシー（オーナー・オペレーター）が認められていないのです。世界で唯一の個人タクシー否認地区だ、と。タクシー会社5社を持つボスの存在がその背景にあるとかでしたが、もし認可される時代が来たらオーナーになりますか」と尋ねてみました。全員が異口同音にYESと応えました。起業家精神は旺盛です。そういえば、日本はオーナー・オペレーター制のトラック版では世界唯一の否認国です。個人トラックの規制緩和を提唱する私ですので、このことは格好の話題にできるでしょう。帰途の機内でも隣り合わせたメキシコ人との会話もその一つです。カンパニー・ドライバーは設備（トラック）は良くても事故を起こし易い。対して個人トラックの場合は老朽化したトラックでも事故を起こさない、経営者マインドの有無がそれであることは常識だ、と全く畑違いの人をして言わしめたことも今後の話題になります。

「SAM (International Business Conference) did deliver what I paid for」(SAM (国際大会) は諸経費に見合うものを与えてくれた) を体感しました。SAMは偉大であり、誇るべき組織です。